

CAMPUS NEWS RIKKYO NIIZA

No.82

— September 2020 —

- SPECIAL DISCUSSION -
生徒&教員 座談会

新しい学び方への挑戦

校長メッセージ
コロナ禍における立教新座の学び

クラブ顧問教員メッセージ
コロナ禍における部活動
- 高校陸上競技部の場合 -

- SPECIAL INTERVIEW -
高校教員インタビュー

「最終学年を迎えた生徒たちを全力で支えたい」

- SPECIAL INTERVIEW -
生徒インタビュー

「高校生活の思い出を友だちと共有したい」



立教新座中学校・高等学校

中学生 × 教員

SPECIAL DISCUSSION 生徒 & 教員 座談会



新しい学び方への挑戦

2020年、新型コロナウイルスによるパンデミックが世界的に広がりました。

これまでのような授業や課外活動ができない状況下で、本校は生徒たちに何ができるのかを考え、状況を見極めつつ新しい方法での教育を行っています。

今回は、中学2年クラス担任であり英語のオンライン授業を実践している北岡先生と生徒たちに、教員の視点から、生徒の視点からそれぞれ授業や学校生活について語ってもらいました。



中学2年 中村 一
Hajime Nakamura



中学2年 中川 龍之介
Ryunosuke Nakagawa



中学2年担任・英語教諭 北岡 常彬
Tsuneyoshi Kitaoka

オンライン授業は楽しい でも日常の交流も大切

手探りながら工夫したオンライン授業

北岡:4月の自宅学習期間を経て、5月11日からオンライン授業が始まりました。基本的には1週間に1回、英語は金曜日に配信することになっていましたが、中学2年生という大切な時期なので、私は火曜日にも配信しました。通常の授業と同じように黒板の前に立って、生徒のみんなが学校の雰囲気を少しでも感じられる動画にしました。なにしろ、4月に進級してから一度も登校できない状態でしたから、見慣れた教室の様子や教師の顔が見えた方が、みんな気持ちを切らさずにいてくれるのではと思ったのです。

中村:パワーポイントや画面収録の授業が多い中、北岡先生の動画はリアルな授業の雰囲気がありました。授業に入る前に、他の先生も登場する英会話のシチュエーション動画を入れてくれて、おもしろかったです。たとえばチャレンが登場した、空港でのパスポートコントロールのシーンがありました。



北岡:同じ人間の顔ばかり見ているのも、おもしろくないと思ったからね。あとは、学年の他の教員に発音練習の場面で登場してもらいました。他にもいろいろ工夫をしていて、特に1本の動画を5〜6分に収める努力をしました。授業は1コマ50分ですが、生徒たちはいくつもの教科のオンライン授業を受けなくてはなりません。ずっとパソコンやタブレットの画面を見ているのは疲れるし、飽きてくることもありますから、私は授業を「音読」「文法」「単語」などテーマごとに小分けにして、それを何本か合わせて1コマ分にセットしました。

中川:確かに、ずっと画面を見続けていると退屈してくるのが正直なところ。動画が短いと、すぎ間時間に息抜きになったりリセットできたりしました。でも、僕は英語が好きだし北岡先生のオンライン授業はおもしろかったので、すぐに次を見たくなくてどんどん先に進みました。

中村:僕は、ご飯を食べる前とかお風呂に入る前の中途半端な時間にも、短い1本を見ることができたので、ありがたかったです。

オンライン授業のいいところ、悪いところ

北岡:でも苦労もあって、恥ずかしながら編集作業が得意ではないので、撮っているときにミスをするとうり直し。普段の対面の授業なら、何かミスをしてすぐに訂正するなど挽回する方法があるけれど、動画でミスが残ってそのまま生徒たちに伝わってしまうことは絶対に避けなければなりませんから。正しく、そしてわかりやすく伝えなければならないことはプレッシャーで、何度も撮り直しました。そのかわり、ミスをしないようにわかりやすく話すための、言葉選びやテンポをブラッシュアップするいい機会になったかもしれません。

中川:先生は大変だったと思いますけど、工夫された授業でも



しろかったです。それに後から見直すことができるので復習がしやすいし、普段の板書よりもじっくりノートを取ることもできました。ただ、普段の授業の方が質問はしやすいですね。その場ですぐ聞けて、対面で教えてもらえるのでわかりやすい。オンライン授業ではコメントに質問を書くのですが、文章では伝えにくいこともありました。

北岡:動画配信のスタイルは、顔が見られないことが一番のネックですね。こちらも生徒たちの反応がわからないので不安がありましたが、次々に動画を作るしかありませんでした。

新しい友だちとの交流はこれから

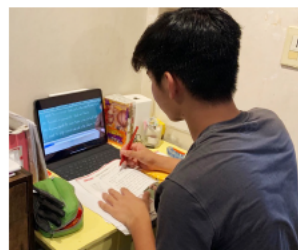
中村:授業ではないですが、ホームルーム(HR)ではオンラインならではのトラブルもありました。HRはライブで集まっていたが、PCの不具合で入って来られない友だちがいました。

中川:スピーカーの調子が悪くて先生の声が聞こえなかったり、機械音が発生してうるさかったりして、HRにならなかったこともありました。

北岡:そういうトラブルがあっても、HRは大切な時間だと思っていました。多感な年頃なのに、友だちと会える日常がない。それは相当なストレスですから、誰かと話をするだけでも気分が変わるのではと思い、HRは9時からと設定されていましたが、8時45分頃からスタンバイして、声をかけながら生徒たちを出迎えるようにしました。そして一応は20分程度で終了して、「残りたい人は残っていい」と声をかけると、毎日のようにオンライン上に留まる生徒たちがいて、そこで話をしました。コミュニケーションのひとつになっていたらいいのですが。

中村:クラス替えをしたので、ライブでHRをやっても、まだ仲良くなれていないクラスメイトがいます。それはこれからですね。でも僕は、オンライン授業自体は楽しむことができました。

中川:そうですね、抵抗なくオンライン授業に入ることができたと思います。でもやっぱり、早く以前のような日常に戻ることを願っています。また普通の学校生活を楽しまたいです。



自宅でのオンライン授業のようす



■1学期 新型コロナウイルス対策実施日程

4月 9日	メールによるディバイス調査
4月10日	郵送で課題を発送 第1弾
4月17日	郵送で課題を発送 第2弾
4月16日	G Suite導入を生徒に案内 ▶ 17日にIDを郵送
4月20日	クラスごとにオンライン面談・授業の研究を開始
4月23日	5月7日よりオンラインでの授業開始の宣言
5月 7日	オンライン始業式
5月11日	本格的なオンライン授業開始
6月 4日	中1・高1登校 出席番号奇数・偶数で時間をずらして登校
6月10・11日	全学年登校 出席番号奇数・偶数で時間をずらして登校
6月15日～	全学年出席番号奇数・偶数に分け1日おきに登校 クラブ活動は環境が整った部で 校長が許可したところから開始(保護者の同意は必要)
6月22日～	クラブ活動が基本的に再開
7月13日～	期末試験 時間をずらして全員登校
7月30日	1学期終業式



コロナ禍における立教新座の学び

状況をプラスに捉えて新しい可能性を広げる

校長

佐藤 忠博

Tadahiro Sato

これまで経験したことのない「コロナ禍での学校生活」ですが、生徒のみなさんとご家族、そして私たちのまわりすべての大切な命を守ることを第一に、学校の方針を考えています。状況に流されて、焦るようなことも避けたいと思っていました。そこで、しっかりと準備をしたうえで、5月からオンライン授業を始めました。遅いスタートだと思われたかもしれませんが、ご家庭にもご協力いただいたおかげで環境も整い、感謝しております。

6月4日には、新入生が2グループに分かれて分散登校するようになりました。登校初日の新入生たちは、嬉しさだけでなく不安も抱えていたはずですが。私は校舎の入り口でみなさんを出迎えたのですが、来てくれた姿を目にしたら嬉しくて、マスクの下で自然と笑顔になりました。それから毎朝、出迎えを続けていますが、日が経つにつれて学校へ来ることが普通になっていく様子が見て取れます。積極的にあいさつを返してくれる生徒も増えてきました。

今回、コロナ禍ではありましたがICT環境を整えはじめたことをプラスに捉えると、生徒のみなさんが学校に来られない時にも繋がることができ、学校でも授業の新しい形や課題のやり取りができるようになるはず。そういう可能性を、どんどん広げていきたいと考えています。その中で、来年度以降の新入生との出会いも楽しみにしています。他者も自分も大切に、お互いの良さを認めて共に高め合っていける人を育てる本校で、ぜひお会いしましょう。

コロナ禍における部活動 - 高校陸上競技部の場合 -

逆境での経験を今後の生きる糧に

陸上競技部顧問/体育科教諭

香取 隆介

Ryusuke Katori

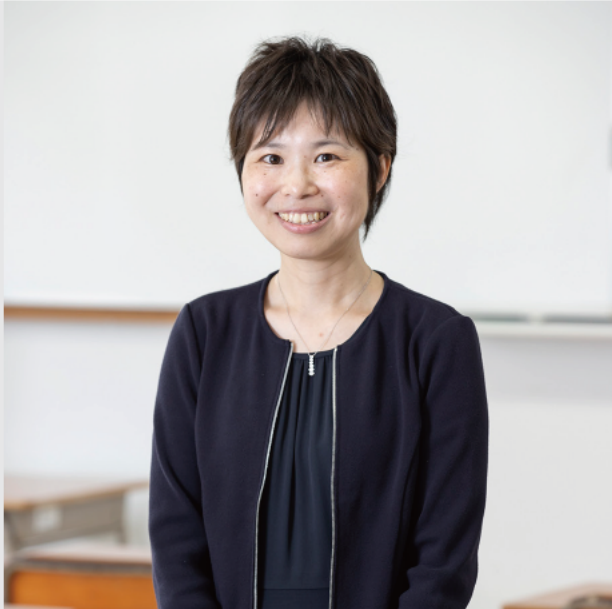
コロナ禍で日常生活が制限される中、部活動のあり方も大きく変わらざるを得ませんでした。

陸上競技部では、3月下旬頃まではグループLINEを使って1週間ごとに練習のモデルメニューを提示し、各自の環境に合わせてアレンジしながら取り組んでもらいました。緊急事態宣言が出る前後からは、「命を守る行動が最優先」と強調し、Zoomを活用してミーティングや座学、トレーニングを行いました。

4月26日に、インターハイ中止が決まった時は、部員たちは大きなショックを受けていました。インターハイに出られるのは、全国の運動部員の中でも2%程度。それだけに大きな価値があり、厳しい予選会から緊張感漂う本大会までの経験が、生きる上での大切な教材になるはずでした。しかも5年連続でインターハイに出場しながら、昨年はあと一歩のところまで出場を逃していたので、2020年は捲土重来を期すシーズンだったのです。残念でしたが気持ちを切り替え、10月開催予定のインターハイの代替大会や来年度以降のインターハイに向けて、チャレンジしていきたいです。

6月中旬から分散登校のもとで活動が再開し、7月のテスト休み明けからは全員での活動ができるようになりました。離れている間も、チームの一体感を失わないことや部員のモチベーション維持に苦心してきたので、全員が揃った光景に感無量でした。コロナ禍のような逆境の中でも起き上がり、前向きに努力し続けることで、これからの彼らの生きる糧にしてほしいと願っています。





SPECIAL INTERVIEW

高校教員インタビュー

高校3年担任／社会科教諭

石和田 京子

Kyoko Ishiwada

最終学年を迎えた生徒たちを全力で支えたい

最終学年を迎えている高校3年生を受け持っていますが、今年は新型コロナウイルスの影響で、例年とはまったく異なる環境の中で4月の新年度を迎えました。

できるだけ不安なく新年度をスタートできるよう、3月下旬には生徒たち一人ひとりに電話をしました。3年生は大学進学に大きく関わる自由選択科目の講座を決定する作業と、卒業研究論文の指導を受ける主査の講座を決定する作業とがあり、不安や迷いを抱えていることが多いものです。生徒本人だけでなくご家族ともコミュニケーションを取ることで、生徒と保護者の不安をできる限りやわらげるように努めました。

本来なら、学校で希望する講座を紙に書いて提出してもらおうのですが、今年は生徒たちが登校できない状況の中、すべてオンラインによる作業となりました。3年生の生徒一人ひとりについて、3～5講座を決定していく作業はかなり大変でした。卒論の主査の講座を決定する際は、特に気を遣いました。一人の教員につき、指導できる生徒が10名程度ですから、希望者が多ければ抽選となります。抽選に漏れた生徒に対して、できるだけ彼らの希望に沿った講座を選択できるようアドバイスをを行ったかったのですが、オンラインのため、例年のようにきめ細かく話しをする機会が持てず、もどかしい気持ちでした。

5月中旬からはオンラインによる授業の配信を始めました。私自身のオンライン授業の準備も、手さぐりの状況から始めました。他教科の先生の授業を参考に、試行錯誤しながら動画撮影をしました。担当する複数の科目の動画を毎週新たに準備する作業は、かなりの労力を要するものでした。

高校3年生は、クラスも担任も2年生からの持ち上がりで、部活動でも2年間共に過ごしてきた仲間がおりますので、すでに生徒たちの人間関係が形成されていたことが良かったと思います。直接会うことは叶わなくても、すでに慣れ親しんだ関係が築かれていました。担任としては、生徒たちが登校できない期間、生活のリズムやメンタル面が心配でしたので、オンラインで行ったHRを工夫しました。

クラスのすべての生徒たちと週に一度はオンラインでつながり顔を見て声を聞くようにするため、生徒たちを8～9人ずつに分けて、曜日替わりでHRを行うようにしました。少人数にしたので、生徒一人ひとりの声に十分に耳をかたむけることができました。生徒たちがこれから勉強に向きあう朝の時間に、家の中でできる気晴らしのアイデアを尋ねるなど、生徒たちの気持ちが前向きになるようなHRを心がけました。

5月中旬から分散登校が始まった6月中旬までの約1か月の間、オンライン授業とオンラインHRを経験したことで、「どんな状況でも何かしら生徒たちとつながる方法はある」ということがわかりました。一斉登校が始まった2学期からもできるだけ一人ひとりの生徒に声をかけ、フォローアップが必要な生徒には面談も行うなど、彼らに寄り添った指導をしていきたいと考えています。

今後の状況も不透明で、大学進学に直結する英検など外部の試験が予定どおり実施されるのかもわかりません。学校としては生徒本人やご家族の不安をしっかりと受け止め、日々の学習や大学進学に向けた適切な指導を行っていきたいと思います。



自由選択科目「日本史演習」授業動画より



SPECIAL INTERVIEW

生徒インタビュー

高校3年
柴戸 優輝
Yuki Shibako

高校生活の思い出を友だちと共有したい

最終学年になるところで、学校に通うことができないという状況になりました。でも、友だちとはLINEや電話で話をするのができたので、それほど寂しさは感じませんでした。ただ、はじめのうちは生活リズムをつかむことができずに、睡眠時間が不規則になってしまって体調を崩したこともあり、時間管理の難しさを感じました。

それから、部活動をするのができなかつたのがつらかったです。家にずっといるよりも、身体を動かしたいと思っていました。今はやっと活動を再開できて、とても楽しいです。僕はソフトテニス部なのですが、感染対策にかなり気を遣っていて、全員で集合するのは禁止で、声出しもありません。練習の終了後には、ボールを消毒します。今までとは違う活動の仕方ですが、あまり違和感なく受け入れています。

4月に進級してからは、オンラインでの自由選択科目決定がありました。僕はすべて第一希望が通ったので安心しました。特に卒業研究論文は自分で決めたテーマで半年以上かけて書き進めるので、指導教員となる主査の先生が希望通りになったことはありがたかったです。

オンライン授業という、これまでになかった方法での授業を経験することになりましたが、自分も含めてみんなパソコンやタブレットには慣れているので、不満や不安の声は聞きませんでした。すんなり授業に入れましたし、何回も見直すことができるため、普段の授業よりも復習したり理解を深めたりすること

がしやすかったと思います。

ただ、科目によってオンライン授業のスタイルは違って、自分にとっての学びやすさに差はありました。また、質問がある場合にはコメントに入れなくてはならないのですが、やはり直接聞く方がわかりやすく、コメント欄で質問することにはなかなか慣れませんでした。でも、こんな状況の中でも変わらずに学ぶことができたことは、本当にありがたかったです。

全体的には、例年と違う学校生活でも、なんとかこなしてこれた印象です。最初のうちはオンライン上のトラブルもありましたが、すぐに慣れて不便は感じませんでした。

正直なところ、どうしても授業内容は減ってしまうので、その分テストがあまり難しくなかったと感じました。ただし、代わりにオンライン上での課題の平常点の割合が普段より大きかったため、テストの点から自分で予想していた成績とは異なる科目もありました。

学校生活という面では、立教新座高校で過ごす最後の年に、スポーツ大会などいろいろな行事が中止になってしまったことが残念です。10月のS.P.F.(文化祭)も、オンラインでの活動発表会になる予定です。学校で実際に開催する方が、模擬店などもあって絶対に楽しいのに、できなくなってしまいました。全員が立教大学に進学するわけではないので、友だちみんなと、何か思い出になるようなことができればいいなと思っています。

< 公式 Web サイト・SNS について >

本誌の内容は、本校 Web サイトや SNS でもご覧いただけます。また、Web サイトや SNS では、本校での出来事など、日々の学校生活の様子が垣間見られるような情報や写真を発信しています。ぜひ、ご覧ください。



※在校生への緊急時のお知らせは「立教新座配信メール」で確認してください。

CAMPUS NEWS RIKKYO NIIZA

キャンパスニュース 立教新座

2020年9月20日発行 第82号
発行/立教新座中学校・高等学校 教務・入試広報課
〒352-8523 埼玉県新座市北野1-2-25
TEL.048-471-6648 [入試窓口]
<https://niiza.rikkyo.ac.jp/>

2020年7月取材。取材・制作等に際して十分な配慮を行っています。